

巻頭言

長田 俊樹

この『地球研言語記述論集』は2009年3月に第一号を発刊しました。ここに第二号を皆様にお届けします。この論集は地球研(正式には総合地球環境学研究所)のインダス・プロジェクトの成果として毎年一回発刊しています。このプロジェクトや論集の成り立ちについては第一号に書きましたので、ここでは繰り返すことはしません。ここでは、プロジェクト・リーダーとして、この『論集』にかける思いや言語学研究に対する考えを書いておきたいと思います。

私が言語学をはじめてから、早いもので30年以上がたちました。その間に、言語学のトレンドほど流行に左右されてきたものはないのではと思えるほど、次から次と新しい理論が提唱されては廃れていきました。そのような流れのなかで、言語学徒は競って新しい理論を追いかけていきました。私はそれを「最新理論追跡症候群」と名付けて、今は休刊になった『月刊言語』に書いたことがあります。言語学者と名乗る以上、最新理論を知らなくては一人前の言語学者ではないと言わなければなりません。裏を返せば、かつて亀井孝が『言語学』と揶揄したように、言語学は言語の学ではなく、言語理論の学になってしまった。そんな印象をいただくのは決して私一人ではないと思います。やはり言語学という以上、言語の学であってほしい、そう願ってやみません。

言語学が直面する、もう一つ重要な問題があります。それが学問の細分化です。これは言語学に限ったものではなく、すべての学問分野にいえるかもしれません。言語学に関して言えば、音声学者は音声だけを対象とし、統語論研究者は統語論だけに専念するといった分野の細分化だけではなく、個別の論文の対象も「語のにおける××について」と細分化されていく傾向にあります。また、言語学会で、日本語の助詞ハとガの区別を扱った研究者に対する質問が、助詞ノに及んだときに、「助詞ノについては私の専門ではありません」と答えたとしても、誰もとがめたりはしません。専門がどんなに細分化されていったとしても、それについてはだれもが目をつぶって仕方がないと思ってしまう。それが現状ではないでしょうか。

私が博士論文でムンダ語の文法を書いたときに、ある日本の先生に文法を書くにはまだ早いと言われたことがあります。その先生にとっては、今の私の年齢(55才)で文法を書いたとしたら、まあ文法を書いてもいい年齢になったと感じるのかもしれませんが、私の実感としていえば、まだ30代だったので文法を書くことができましたが、今この年齢で文法を書くのは正直しんどくて、書く自信がありません。つまり、徹夜がまったく苦にならないような若いときにこそ文法を書くべきです。

私自身文法を書いて思ったのは、自分の弱点は統語論にあるということです。その反省から、後には統語論的視点に立った論文を書くことができました。文法を書くには、すべての分野に関心を持たないと、偏った記述になってしまいます。最初から、得意な分野だけをとりあげた博士論文では、自分の弱点もわかりませんし、当該言語の全体像を知ることはなかなかできません。文法を書くことで、自分の弱点を知ることができ、当該言語をさらに深く知ろうとつとめることになって、音韻論から統語論まで、語彙論から語用論までと、言語学の総合力が自然とあがっていきます。このことは私自身の経験からはっきりと言えます。

また、理論を追っていても、当該言語の網羅的な記述はなかなかできません。というのも、すべての分野にまたがる言語理論がなく、音韻論か、あるいは統語論に偏った理論が多いからです。かつてムンダ語に取り組んだことのある言語学者のなかに、日本語にも翻訳された『英語変形文法の要点』の著者、ランゲンドンがいます。彼はムンダ語が変形文法の枠組（その時点では標準理論）ではうまく記述できないと、論文のなかで告白しています。結局、ランゲンドンはムンダ語については二つ論文を書いただけで、それ以上は取り組みませんでした。ここでムンダ語記述から新たな文法理論を導こうとしなかったことに、大げさかもしれませんが、理論の限界をみたような気がします。

この『論集』の執筆者の多くは、個別言語に取り組む、若い言語学者たちです。ここまで文法を書くことの重要性を説きましたが、千田君や稲垣君のように、博士論文ですでに文法を書き上げた人もいます。日本でも、博士論文ではあまり記述されていない言語の文法を書くという、新たな伝統が生まれつつあるように思います。この『論集』もそういう伝統を支える一翼を担えることを願いつつ、この巻頭言を終えることにします。

2010年3月18日
娘の二十歳の誕生日に